

昭和二十年二月

二八六部隊  
幹部候補生

八月

ソ連軍侵攻による戦闘に参加

十一月

ソ連コムソモリスク地区 ホル

モリン地区

昭和二十四年十二月

ナホトカ経由舞鶴港入港 復員

復員後

消防団 農協理事各委員長 区

長 神社総代 寺院檀徒総代

全抑協県連副会長 同中央評議員

(栃木県 黒川 護)

## シベリア抑留体験記

千葉県 鈴木 甲子幸

先般「異国の丘」という一文が広報『ひかり』の「町長ひとりごと」欄に掲載されていた。町長さんがシベリア抑留について深い関心を寄せられていること

に敬意を表しながら読ませてもらった。そこで、シベリア抑留者の一人として、抑留生活の一端を紹介し、戦争についてこの面からも考えてもらえたら幸いである。

終戦、そして牡丹江へ

中国の東北部、旧満州ハルビンで終戦を迎えた私は、武装解除を受け牡丹江に集結を命ぜられた。出発時、できるだけ多くの物資を馬車に積みこみ出発したものの、道中の悪路に悩まされ、結局、必要最少限、身につける範囲の物だけとなった。

ソ連軍との戦闘の生々しい痕跡が各所に残っていた。巻脚絆を巻いたまま、片足がむき出しに見える日本軍兵士の死体、悪臭が漂う中をひたすらに歩き続けた記憶が鮮明によみがえってくる。戦闘部隊は、汚れた軍衣をまとい、傷ついた戦友を担架に乗せて同行している。苦しうに顔をゆがめた兵士の顔が今でも目に浮かぶ。敗戦の無残さ、無念さを異国の山野で、いやというほど見せつけられた。

## 牡丹江收容所

満州各地から続々と武装解除されたおびただし数  
の日本軍や地方人が集結してきた。飯盒炊飯をしなが  
らの野営生活がしばらく続いた。この時の食糧支給は  
ひどいもので、家畜並み、時にはそれ以下であった。  
コウリヤンというモロコシの一種を搗いたときには、  
れた胚膜が配給になったときがあったが、これだけは  
みんな食べられなかった。

ナホトカ経由で日本へ帰国（ダモイ）というふれ込  
みで、身体検査が行われ、続々と部隊を編成し、牡丹  
江を後にしていった。私は体力が劣り衰弱していると  
いうことで残留組に加えられてしまった。

ダモイ組の大移動が一段落し、九月も過ぎて雪の降  
る頃になっても帰国命令は出ない。あきらめて、牡丹  
江での冬越しを覚悟し始めた頃、兵舎へ凍傷患者や栄  
養失調でやせ細りふらふらした旧日本兵の一団が入っ  
て来た。話を聞くと、ダモイどころかシベリアで作業  
大隊を編成され、伐採や炭鉱などの強制労働に従事さ  
せられ、このような状態になったとのことである。残

留してかえって良かったとも思い、また反面、シベリ  
アで過酷な労働に従事させられている同胞を思い、わ  
が身もいつシベリアへ連れて行かれるかもわからない  
不安と希望のない冬を過ごした。

市街に作業に出されては、物資輸送の貨車積み込み  
などもやらされた。ソ連軍は日本軍が満州に残した物  
資はことごとくソ連内へ運ぶつもりだった。大豆  
の積み込み、セメント運搬等、苦しい作業も続いた  
が、時には日本人の社宅や官舎、民間人の住居などへ  
も行き、かつての生活を垣間見ることができた。散乱  
した家屋の中に文学全集などがあり、特に島崎藤村の  
『破戒』をこっそり持ち帰り宿舎で読んだ記憶が残っ  
ている。

## シラミと発疹チフス

シラミには抑留期間中ずっと悩まされたが、牡丹江  
では特にひどかった。全身シラミまみれと言っても過  
言ではない。シャツの縫い目などはシラミの卵でまっ  
白なつぶつぶが連なっていた。イカのような形をした

シラミがぬたぬた歩いている。体じゅうがむずむずとかゆい。暇があるとシラミつぶしが日課であった。

そんなとき牡丹江にシラミを媒介とする発疹チフスが大流行した。私も例外ではなかった。大変な高熱に襲われる。四十度を超える患者を、次々に浴場に連れて行き、素裸にして、衣服の蒸気消毒、裸で一列に並べられ、石けんをつける者、毛をそる者、流れ作業でシラミの温床となる場所を取り除かれ、最後に湯舟を通過して、消毒を終わった衣服を身につける。この間に風呂場で死亡してしまう患者もあった。

一連の消毒を終わった患者は、いよいよ病棟へ行くのだが、病室は患者であふれており、空いているところがない。私はフーフーフーフとして入口に立っていると、しばらく待つように言われた。間もなくすると、今まで寝ていた患者が息をひきとったらしい。死体が片づけられ、そこに休むよう指示された。私はここで何日か死と生の間をさまよっていたようだ。

高熱にうかされ、天井がグラグラ揺れ動いている。そのうち、兵舎が船になり、牡丹江の川に浮いて、何

日ばかりかで、わがふる里、栗山川の川口にたどり着いた。私はそこで目ざめたのか、隣接の患者の何人かに「おい、ここは俺のふる里だ。俺の家はすぐそこだから来てくれ。餅をつけてごちそうするよ」と声をかけていたことを後で聞かされた。食糧に飢え、白米食（銀メシ）やアンコロ餅にあこがれていた、捕虜生活の一端がしのばれる。このように、夢うつつの世界をさまよいながらも、運よく病魔に打ち勝つことができた。

意識を取り戻し、快方に向かってから、同室の患者が、急にベッドから立ち上がり、直立不動の姿勢で、「〇〇上等兵、ただいま内地帰還を命ぜられました。ここに謹んで申告します」と、大声を張り上げた。言い終わると同時に積雪の屋外へ駆けだしてしまった。私同様、内地帰還を夢見てこのような行動に及んだのだらう。薬もなく、満足な治療も受けられないまま衰弱して死んでいった同胞は、牡丹江だけでも数知れないだらう。毎日のように死体が荷車に積み込まれ、何台となく牡丹江のほとりで茶毘に付かれたと聞かされ

た。

牡丹江からシベリアへ

発疹チフスに悩まされた牡丹江の冬も終わり春も過ぎた頃、シベリア行きの列車に乗せられた。家畜などの輸送に使われる箱型の貨物車で、まるで家畜並みの扱いである。箱の中に押し込められた状態なので、外部の状況は全然分からないまま、列車は昼夜走り続けている。時折停車した所で用便をたす。列車を降りると必ず警戒兵が銃を肩にかけて逃亡を見張っている。

食糧支給も十分でなく、塩鮭の頭がそのまま支給され、かじったことを覚えている。身につけていた腕時計やバンドを黒パンと交換して空腹をしのいだりした。ソ連兵も民間人もやたらとこれらの物を欲しがった。輸送に当たったソ連の将校が、食事時になると捕虜である我々のところへスプーンを借りに来た。戦時中にもっぱら軍事産業にしぼり、日用品の生産はほとんどストップされていたらしい。

国境を越え、ハバロフスクを通ったようにも思われ

るが、記憶が定かでない。何日か経て列車はだんだん引込線の森林地帯へ入って行った。

伐採作業とノルマ

沿海州に近い山の中のラーゲル（収容所）で伐採作業に従事させられた。シベリアの冬は厳しい。零下二十度から三十度くらいの厳寒である。まばたきをするごとにまぶたが凍りつくようになる。吐く息はすぐ凍りつき、まゆ毛やひげが真っ白に張りつく。収容所の出入には厳しい人員点呼がある。五列に並ばないと警戒兵が数えられない。いらいらしながら待つ間の寒さが身にしみる。

伐採用の鋸は、両端に柄のついた二人用で、鋸まで凍りついている感じである。ラーゲルから伐採場の山まで、銃を肩にかけた警戒兵に引率され、みんな黙々と防寒靴をはいた重い足どりで雪の道を歩いた。寒さと空腹に襲われ、栄養失調の足や顔はむくみを帯び、歩みは遅い。警戒兵は早く歩かせようと「ダバイ、ダバイ（早く、早く）」とがなりたてている。

伐採場に着くと、ノルマ（作業量）を果たさなければラーゲルへは帰れない。しかし、山の中に入れば監視の目は遠のき、ノルマさえ果たせば自由でのびのびとできた。

伐採に入る前に、まず、白樺の皮をはいで、つけ木にして火をたきつける。たき火で体を十分に温めてから仕事にかかる。手頃な木を決め、倒す方向を見定め、その方向に斧を入れて、本格的に鋸で挽いていく。斜面などで倒す方向を見誤り、二メートルに輪切りした薪を積み上げるのに苦労することも間々ある。

また、裏挽きなどが不十分なため、凍りついた木が途中から裂けて、幹が上へはね上がり、大木の下敷きになりそこなったこともある。時には、仲間の倒した木がこちらへ倒れかかって、危なく難を逃れたこともあるが、仲間の何人かは逃げ遅れて倒木の下敷きになって命を奪われてしまった。

ノルマは、二メートルに輪切りをした薪を二人で六立方メートルに積み上げて、検査を受ける。現場の状況により苦労することもあったが、二人の協同作業で

業に終わることが多かった。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年二月二十二日

昭和二十年 三月 五日 国民学校教員として服務

中、現役兵として広島西練兵場に集合

〃 三月十五日 五二六部隊に入隊

〃 八月十八日 ハルビンで武装解除

〃 十月十七日 牡丹江へ集結、原隊相次ぎ

シベリアへ送られるも残される

昭和二十一年五月 沿海州近辺、山林で伐採、その間

転々と移動させられる

昭和二十二年五月 ナホトカより朝嵐丸で舞鶴へ 復

員後教員に復職

（千葉県 高橋 孝之）